解釈と鑑賞

狭衣物語解釈 (13)

本田義彦

中将の君は、御子の御有様の面影に恋しくて、いみじく物あはれと思ひたるさまにて、空をつくづくとながめ入りたる気色、「いとどこの世にも心とどめずやなりなむ」と、危く後めたく思し召されて、「何事に心を少し紛らはさむ」と思しまはすに、「大臣になすと嬉しと思はじ、大殿もさらに承けひかじ」と、かひなく思し召さる。皇太后宮の女二の宮の御かたち心ばせ、ことわりも過ぎておはしますを、いみじう愛しきものにし奉らせ給ひけり。一の宮はこの頃斎院にておはします。后もこの宮をばたぐひなく思ひかしづき聞えさせ給ひて、世の常の御有様など思しかくべくもなきを、中将の笛の音に天人だに聞き過ぐし給はで下りおはして誘ひ給へるに、ただにてやませ給はむもあるまじき事なるに添へて、かういと心細げに思ひあくがれぬべき気色なるに、「二の宮のこの頃盛りに整ひ給へる御有様見奉らば、この世はえあくがれじ」と思し召しなりぬ。

〔口　訳〕

中将の君（狭衣）は、天稚御子の御有様が面影となって恋しくて、ひどくなんだか心にしみじみと感じている様子で、空をつくづくとながめ入っている様子は、「なお一層この世に心をとどめないようになってしまいはしないだろうか」と、帝は危険に気がかりにお思いになって、「何事によって狭衣の心を少しでも紛らわそうか」と、いろいろ思いめぐらされるのに、「大臣になしても狭衣は嬉しいと思うまい。父堀川の大殿も大臣になすことを承知なさるまい」と、帝は何ともいたし方なく思っておられる。皇太后宮の女二の宮の御容貌やご気質は、道理をも過ぎてご立派でいらっしゃるのを、帝はたいそう可愛らしいものとし申しておられる。一の宮はこの頃斎院でいらっしゃいます。お后もこの二の宮を似る者もないほど可愛く思い大事にお育てなさっているし、帝は世間普通のご結婚など思いもよらないことだったけれど、狭衣の中将の笛の音に天人まで聞き過しなさらないで、地上に下りておいでになって天上に昇ることをお誘いなさったのに、何の恩賞もなしにすませるのもあってはならないことだし、その上にこのようにたいそう心細そうにふらふらと何処かへ行ってしまいそうな様子なので、「二の宮がこの頃娘盛りに整っていらっしゃるご様子を狭衣がご覧になったら、この世をすててふらふら何処かへ行ってしまうなどということはできますまい」と、帝は狭衣と女二の宮とを結婚させようという気におなりなされた。

〔註　記〕

○中将の君　狭衣のこと。（系図参照）

○御子　天稚御子のこと。狭衣の笛の音の素晴らしさに心ひかれて地上に下り、天上に狭衣を誘ったことは前出。（「国文研究」第二十二号　昭和五十一年）

○おもかげ　面影・俤　などの漢字をあてる。①顔つき　②幻影　ぼんやりと目さきに見える姿　などと辞書にはあるが、ここは、先に自分を天上に誘いにきた天稚御子の姿が、狭衣の目さきにちらついて思い出されること。

○いとど　これまでだって「この世に心とどめ」ないそぶりがあったが、天稚御子が天上に誘いにきてからはなお一層という意。

○この世に心とどめず　出家・遁世したいという意。

○危く後めたく思し召されて　主語は帝。狭衣の父堀川の大殿の弟で嵯峨院。

○思しまはすに　主語は帝。

○おとど　大殿・大臣　などの漢字をあてる。ここは狭衣の父堀川の大殿のこと。

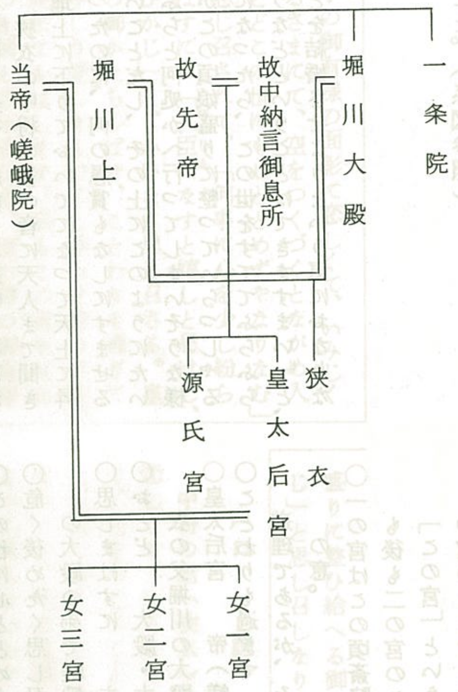
○皇太后宮　帝（嵯峨院）のお后。

○ことわりも過ぎて　皇女であるのですぐれているのは道理であるが、その道理を過ぎてもっとりっぱである　の意。

○一の宮はこの頃斎院におはします　この項衍字か、前も後も二の宮のことを言っているし、特にすぐ後の「この宮」という表記の仕方からも、「この宮」は二の宮のことでなければならないので、「一の宮云々」の項があるのはおかしい。二の宮のことが出てきたので、誰かが一の宮のことを註記したのが、本文にはいったのではなかろうか。この点内閣文庫本の本文の方が筋は通っているが、こちらもやや説明的。（校異参照）

○世の常の御有様　臣下の者に嫁がせるなどという世間普通のご結婚の意。

○思しかく　主語は帝。
○ただにてやませ給はむ　天人まで聞き過すことのできないほどの狭衣の素晴らしい笛の音に対して、何の恩賞も与えずすておくこと。
○思いあくがれぬべき気色　「あくがる」とは、心身が何かにひかれて、もともと居るべき所を離れてさまよう意。従って、ここでは狭衣の中将が天人にひかれて天上に登ろうという気をおこすこと。
○思し召しなりぬ　主語は帝。きれいな女二宮（帝の次女）と結婚させたら、狭衣もこの世に落ち着くだろうと、女二の宮と狭衣との結婚を決意されたのである。



鎌—鎌倉市図書館蔵本（古典研究会刊　上　四五頁　二行）
古—古活字本（朝日新聞社刊　日本古典全書本　上　二〇五頁　六行）（底本）
内—内閣文庫蔵本（岩波書店刊　日本古典文学大系本　四七頁　五行）
蓮—蓮空本（古典文庫本　第一冊　三一頁　一〇行）
九—九条家旧蔵本（未刊国文資料　上　二三頁　一二行）

註　—　底本と同じということ
××その文字がないということ

鎌　——————————××××××××××————××××—う——う—
古　中将の君は御子の御ありさま×××××××××××のおもかけに××××恋しくていみじくも
内　————————××—つくり給へるふみの心ばへなど×———めでたく———××××
蓮　——————————××××××××××————×××—う××××—
九　——————————××××××××××————×××—う××××—

鎌　————×—けしき——————————さま×———××———×—
古　のあはれと思ひたるさま×にてそらをつくつくとながめいりたるけしきいとど××この世に×心とゝめ
内　××××××××××××——————————しく××××××
蓮　————×—けしき——————給へ×—さま×———××———は———
九　—————けしき——————給へ×—さま×———××———は———

鎌　————×——————————×———××———×—
古　すやなり×なむとあやうくうしろめたくおぼしめされて何事に×心をすこし××まぎらはさ×むとおほ
内　×××××××————て御らむぜらるるに××××———×××—思ひ———せ—
蓮　————給——————————て———××———×—
九　————給——————————て———××———×—

鎌　――――――も×××××××××――――×――――――――
古　しまはすに大臣になすと×××××××××××うれしと×思はしおとともさらにうけひかじとかひなく
内　――――――もそれをかしこしとも――――も―さ――――――――
蓮　――――――も×××××××××××××××××××××××――――――
九　――――――も×××××××××××××××××××××××――――――

鎌　――――――御はらの×××××××××××××××××――――××××××
古　おほしめさる皇太后后の×××××××××××××××××××××女二の宮の×××××××
内　――――して――御はらのひめ宮三人おはします一人はこのころ斎院×――は×××××××
蓮　――――すに――御はらの×××××××××××××××××――ことはりもすぎて
九　――――すに――御はらの×××××××××××××××××××――ことはりもすぎて

鎌　――――――は――――――――――――――――――――――――×――
古　御かたち心ばせことわりもすぎておはしますをいみじうかなしきものにしたてまつらせ給ひけり一の宮
内　――――よりはじめてめでたく――――××××××××××××××××××××××××
蓮　――――へも×××めでたく――――しつ――――て×××――
九　――――へも×××めでたく――――しつ――――て×××――

鎌　――――×――――――――――――――――――――――――――――×――
古　はこのころ×斎院にておはします后もこの宮をはたくひなく思ひかしつききこえさせ給ひてよのつねの
内　×××××××××××××××上はとりわき×かぎり――――――――――――――×――
蓮　――――の――――××――――×――――――――――――――――――×――
九　――――の――――××――――×――――――――――――――――――×――

鎌　――――×――××――う――――×――こよひの御――――――――ご――
古　御ありさまなと×おぼし××かくへくもなきを×中将の×××××笛のねに天人だにきゝすぐし給はで
内　――――は――××―けざりつれども此――こよひの×――――――――――
蓮　―事×××――×――めし――あらねど――こよひの×――――――さ××―
九　―事×××――×――めし――あらねど――こよひの×――――――さ××―

鎌　――――――××××××××××××――――××――――――――――
古　おりおはしてさそひ給へるに×××××××××××××たたにてやませ給はむも××あるまじき事なる
内　あまくだり×あ――――をわれなくなくひきとどめて――あらむはむげに×××――――り
蓮　――くだり給てあ――ふ×―×××××××××××――――事には――――
九　――くだり給てわ――××―×××××××××××――――事には――――

鎌　――――――――――――――――――――――――――――――――――
古　にそへてかういと心ほそけに思ひあくがれぬへきけしきなるに二の宮のこのころさかりにととのひ×給
内　×××××××××××××××××××××××××××××××――の×××××××××
蓮　―××××××××××××××××××××××××××――――――――――――をり―
九　―××××××××××××××××××××××××××――――――――――――をり―

鎌　――――××××××――――×――――×――――××××××××××××
古　へる御ありさま×××××みたてまつら×はこの世×はえあくがれじと×××××××××××××××
内　××――――はさりとも――――りな―てんじくへも――――我御心にたぐひなく思ひきこえ
蓮　――――××××××――――りて――――に――――××××××××××××××
九　――――××××××――――りて――――に――――××××××××××××××

鎌　××××××――――――×―
古　××××××××おほしめしなり××ぬ
　　させ給ふまゝに――――よ―けり
内　××××××××――ひ××――給―
蓮　××××××××――ひ××――給―
九　××××××××――ひ××――給―

（本学教授）

昭和51年度 卒業論文題目

青木　幸子　「醒睡笑」について
赤塚千鶴子　「伊勢物語」の語彙論理的考察
　―「大和物語」との比較を中心として―
池田　恭子　近松の世話悲劇における遊女
池部　昭子　暗夜行路論
井手　幸子　枕草子副詞「え」考
井上　淳子　古代文学における蛇について
井上　智子　宮本百合子の作家的出発
内空閑裕子　素材の面から見た連歌と俳諧
大坪　泰子　島木健作論―転向の問題についての考察―
岡部久美子　万葉人の自然観―秋―
勝村　幸子　安部公房論
金井真理子　軍記物語における武士の倫理観
　―主従倫理をめぐって―
神園　康子　万葉集・竹取物語における神仙思想
川上　裕子　万葉四期における枕詞の推移
岸川久美子　謡曲『綾鼓』と『恋の重荷』の一考察
城門　欣子　万葉集における「夢」考
草野　章子　枕草子に於ける「をかし」考
小材　葉子　室町期の継子物語―その特徴と成功の理由―
児玉富美子　「高瀬舟」の漢字―国語国字問題と鷗外の漢字使用意識について―
斉藤　信子　平家物語における「候」ふ
末広　和子　蕪村―その色彩と絵画性―
中角　幸子　日南市飫肥地方における敬意表現
中村　幸子　万葉集「挽歌」考
中村真哉子　川端文学における女性の系譜
　―かなしさの主題―
近沢　史　宮沢賢治「ひかりの素足」論
馴田　弘子　伊勢物語における色彩について
西川久美子　芭蕉と蕪村の「月」の句について
西沢　五代　「浮世風呂」について
橋本　雅子　二十一代和歌集「酒」考
畠山　京子　長塚節『土』論―〈自然〉の形象―
浜田　尚子　「夜の寝覚」語彙論的考察
原田　美和　接尾語「めく」の研究
半田　仁美　「源氏物語」における光源氏のモデル論について
平野けい子　外来語についての一考察―四種の現代雑誌を中心に―
藤木美奈子　「源平盛衰記」の性格の一考察―登場女性の流布本との比較を通して―
藤本　邦子　近松心中物の研究